学 位 論 文 要 旨

学位論文題目　　「戦前期における幻想文学の考察　ー尾崎翠、佐藤春夫、内田百閒をめぐってー」

申請者氏名　カテリーナ・オリハ

本研究は、日本の大正・昭和の幻想文学の作品の分析を通して、「幻想文学」というジャンルの再検討の試みである。研究の対象は尾崎翠の『こおろぎ嬢』(昭和７年) と『地下室アントンの一夜』(昭和７年) 、内田百閒の『虎』 (昭和１２年) 佐藤春夫の『スペイン犬の家』(大正６年) である。各小説の特色と幻想的な特徴を確認し、幻想文学の前提まで遡ることは、その方法である。

序論では、「幻想文学」の定義の多様性にもかかわらず、そのジャンルの起源として小説内に起こる「不思議な出来事」がみなされてきた。しかし、人間の認識のレベルにおいたら、「不思議な出来事」が起こる幻想文学も、写実的な文学も、人間が掴める現象と捉え、物事の本質は到達できないという点は一緒である。そのような問題意識を持つ筆者は各作品を次のように分析した。

第1章「尾崎翠の『こおろぎ嬢』の語り分析ー定義不可能な「私たち」と曖昧な情報をめぐってー」では「私たち」という複数形の語り手の語りを焦点に置き、この作品の全体的な意味について論じた。「私たち」は、主人公に関する情報の間接性とそれゆえの曖昧さ、不確実性を強調し、自己の語りの主観性にも意識を向けている。その結果、第一に、人間は世界と関わるとき、クオリア通して世界を把握する他なく、客観的な世界に到達することができない。第二に、人間は自己の主観と他人の主観的な意見 の間接性・曖昧さを超えることは原理的にできないが、「私たち」の語りの自覚性によって、自閉された認識の有り様に気づき、相対化できる。以上が本小説の語りの機能だと解釈した。

第2章「内田百間『虎』論ー「言葉以前」への志向ー」では、小説において「虎とは何か」という疑問に確実に答えることができないということを前提にし、「虎」の分からなさはどのような意味を持つか、ということについて論じた。「虎」は直接に登場せず、描写もされず、その姿も本質も全く解らない「何か」として語られる。「虎」を直接に五感で捉えることができない語り手や登場人物は、しかし、「虎」という言葉を使い、「虎」を分かったつもりにすることは、「虎」という言葉と、それで表される「何か」の間の埋めようのない落差を指している。それは何を表しているかと言うと、「虎」の認識不可能性であり、言葉以前

の世界であるということだ。そして、「虎」の分からなさは、人間の認識のレベルにおける世界としての「他者」の分からなさと同じ次元のものであり、それに対する登場人物の態度は「言葉」の世界で生きている人間の態度であり。そして、語り手の語りを焦点に置くと、『虎』という小説は、人間が言葉で表現できない領域を如何に小説で表現するかという文学的実験であるというのが筆者の解釈である。

第3章「佐藤春夫『スペイン犬の家』論」では、小説に起こる「変身」と語り手の視線を中心に論じた。先行研究は、この変身が語り手の目の錯覚だったか、小説内に本当に起こった出来事だったか、という二つの対立的な解釈にとどまる。しかし、「現実」も、「非現実」も、人間の認識によって同様なものとして捉えられるという前提に立っている筆者は、「変身」という出来事よりも、語り手はどの目でこの「不思議な出来事」を見ているか、つまり語り手の視線を分析し、次のようなことが見えた。「私」は世界を分かりきったつもりに捉え、小説内の様々な物事を自分の主観の枠に入れる。しかし、最後の語りの変化によって「不思議な出来事」は絶対的な「他者」として現れた可能性がある。「他なるもの」として世界を捉えている人間は「他者」に出会う経験が小説の最後の二行で語られている可能性がある。

第4章「尾崎翠の『地下室アントンの一夜』論ー詩人の危機と地下室で開かれる「対話」を巡ってー」では、登場人物の「対話」の意味について論じた。詩人である「僕」は詩を書けない危機を克服できたのは、実在ではなく「心の中」のその「対話」によってだけである。つまり、今まで心を閉じた状態にいた人間は、「他者」である世界に心を開くことによって、「他者」との対話的関係を作り、芸術作品を作れるようになる。このように、この小説における「対話」とは、言葉の交換としての日常的な対話ではなく、主客二項対立を超える「他者」との関係の結び方であると解釈した。

「結論」では、各章における小説の分析結果を確認し、三人ともの作家たちは異なる方法にもかかわらず、同じことを描いているという結論をした。それは、人間の認識において本当に「他者」を掴むことができないということである。それこそが私たちの認識の有り様であり、幻想文学の大前提となっている。

（様式９）

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 115 号	氏　名	カテリーナ・オリハ
論文題目	戦前期における幻想文学の考察――尾崎翠、佐藤春夫、内田百閒をめぐって――		

（論文審査概要）

本学位論文は、日本の戦前期の幻想文学からいくつかの作品を選んでその表現方法と語りを検討する。研究の目的は、従来「不思議な事」「現実に起こりえない事」を描く文学ジャンルとされてきた幻想文学の特質を、より具体的に明らかにしようとするものである。研究対象として取り上げたのは、尾崎翠『こおろぎ嬢』(昭和７年)、『地下室アントンの一夜』(昭和７年)、内田百閒『虎』(昭和 12 年)、佐藤春夫『西班牙犬の家』(大正６年)の四作品である。

序章に論文の目的、モチーフを記した後、以下の各章で各小説を次のように分析している。

第一章では、尾崎翠の『こおろぎ嬢』の語りを分析する。「私たち」という複数形の語り手は、主人公に関する情報の間接性とあいまいさ、不確実性を強調し、語りの主観性に意識を向けるとともに、そのような認識を相対化する可能性に関心を向けていると解釈した。

第二章では、内田百閒『虎』を取り上げる。本作では、「虎」が直接登場せず、描写もされず、姿も本質も解らない「何か」として語られることから、人間の認識不可能性、言葉以前の世界を示すものと解釈し、本作の意義は、言葉で表現できない領域を表現しようとする文学実験にあると述べる。

第三章では、佐藤春夫『西班牙犬の家』について論じる。先行研究は本小説の「変身」を語り手の目の錯覚か本当に起こった出来事かという二者対立で問題にするのに対し、本論では、「現実」も「非現実」も同じく人間の認識の所産であるという観点から、本作の「変身」は、一般的には「他なるもの」として世界を捉える人間の眼に、絶対的「他者」が出現した場面であると論じた。

第四章　尾崎翠の『地下室アントンの一夜』論では、詩人である「僕」が詩を書けない危機をいかに克服したのかを論じた。「他者」である世界に心を開くことで、「他者」との対話的関係を構成するにいたる経緯を跡づけ、芸術創作が主客二項対立を超えて「他者」と関係を結ぶ「対話的」営みであることを論じた。

結論では、各章の分析結果を通して、これらの作品がいずれも人間における他者認識の不可能性を扱っている点で共通していることを確認した。すなわち、「幻想文学」という文学ジャンルが単に「不思議なこと」を描いて読者を楽しませるものであるのにとどまらず、人間の認識のありようそのものに迫ろうとする要請を担っていることを明らかにしたといえる。

本研究の意義は、作品分析を通して「幻想文学とは何か」という問題にアプローチする糸口を確認し、それへの出発点を明示した点にあるといえる。

以上より、本研究は次の点を評価できる。

1．創造性
従来の幻想文学研究を十分に踏まえたうえで、新しい論点，仮説が示されており、幻想文学研究における貢献が明確である。

2．論理性
作品の分析を踏まえて結論を導く論証手続きは慎重、適正であり、文学研究の方法について優れた達成を認めることができる。

3．厳格性
先行研究が十分に渉猟咀嚼されているとともに、新しい見解を展開する上では哲学研究の成果を効果的に援用するなど、論理運用の厳密さは高く評価できる。

4．発展性
研究において哲学的知見を積極的に取り入れるなど、既存の文学研究の'常識'的方法を逸脱するかに見える点もあるが、それはまた、文学研究の方法を大きく広げ得る可能性を萌芽的に提示するものであるといえる。

以上により、審査委員会における審査委員の合議によって全体の評価が「達成できている。」との結論に至り、論文審査結果を「合」とする。

論文審査結果
合・否

審査委員　（氏 名）村上林造

（氏 名）吉村誠

（氏 名）有元光彦

（氏 名）

（氏 名）